

質問に答えて(齋藤陽道さん・盛山麻奈美さん)

Q ろう学校の職員に対しての希望、要望とかありますか。

子どもの聞こえや、手話に対する考え方がどうであれ、手話という選択肢をつねに掲示しつづけてほしいです。(陽道)

聴力、人工内耳、補聴器着用の有無に関わらず、生徒全員が手話を必要としています。先生同士でもぜひ手話で会話を。

卒業後の進路、就職先を一緒に考えていただくとき、「障害」「ろう」というくくりで探すのではなく、その子を見て、リサーチし、提案してほしいです。

小学部以上は性のことを、中学部以上はお金・福祉・行政に関わることを学び、討論することができる機会をどんどん設けてほしいです。成人ろう者をみると、リボ払いとか、取扱説明書をちょっと読めばわかるような仕組みに対して無防備な者が多いような印象があります。(麻奈美)

Q- 生まれ育った環境が違いすぎるお二人が惹かれあったところは何かをお聞かせいただけたらいいなと思います。

同じ学校だったからです。そして、人間同士としてのケンカができる方だと思ったからです。(陽道)

一緒に気楽になんでも楽しめる、共有することができるひとだと思ったから。最近は「異なるということは宝だ」と思っているところにますます惹かれています。(麻奈美)

Q- みんなの手話で、お子さんの好きが10個集まると幸せになると言っていたのをすごく覚えているのですが、その後そういう子どもの手話の独特な解釈で印象に残っていることがあったらぜひ聞きたいです。

ん～？ たくさんあってわからないです。『せかいなことば』をぜひ。。。 (陽道)

最近のだと、コップを傾けて水をこぼす仕草で、「じゃあね」を表現しているのが面白かったです。(麻奈美)
例文「アイス無いの？じゃあね、果物はある？」

Q- 陽道さんにお聞きしたいのですが、撮影時、被写体とのコミュニケーションはどのようにされているのでしょうか。

筆談です。筆談ができないような方のばあい、スマホの音声入力とか。もしくは、いっしょにごはんを食べに行きます。(陽道)

Q-麻奈美さんはろう学校とデフファミリーのご家庭以外で、ろう児対象の習い事やフリースクールに通われた経験はおありでしょうか。

中学1年の頃からろう児対象の「スマイルフリースクール」へ通っていました。そこには幅広い年代のろう児と、様々なタイプの成人ろう者がいたので貴重な体験をすることができました。(麻奈美)

Q- 話し言葉や文字の理解や文化を持たない子どもや人には、わたしは視覚的なコミュニケーション、身体的なコミュニケーションを取ったりしていますが、お二人が相手と感覚を共有したい時に大切にされていることがありましたら教えていただきたいです。

触れる、見つめる、いっしょにご飯を食べる。といったような、時間をともにして過ごすこと。まずそれをしてから、相手によって、接し方を考えます。同じからだはひとつもないので、同じやり方が通用するとは全然思いません。なので、相手によって大切にしなければならないものは異なります。(陽道)

目の前にいるそのひとを、そのひととして見つめるということを大切にしています。性別、名字、障害、肩書きなどは社会的な視点で付けられたものなので、参考程度に受け取るぐらいで。過去も関係なく、今のそのひとからのサインをみて、向かい合っていきます。(麻奈美)

Q- まなみさんが怒るときは声が出ている?というようなお話がありましたが、 どんなときに怒る(叱る?)ことがあるのですか??

怒るとき…いろいろあります。最近怒ったのは、長男が硬いおもちゃを次男の顔へ故意にぶつけたとき。(麻奈美)

Q- 齋藤さん、盛山さんのように、積極的に生きる、何事にも興味関心を持って生きるって、どうしたらいいのでしょうか。これはきこえない、きこえる関係ないと思うのですが…生き方について、もっと知りたいです。

自分を必要以上に大事にしないで、だれかのために自分ができていることを考えて探し続けるといいとおもいます。(陽道)

考えたり、もやもやすることは溜め込まず、すぐに誰かに聞いてもらったりするといいと思います。アウトプットすることで自分自身の気持ち、考えの整理もできて、あたらしい視点が生まれます。そして、人をどんどん尊敬し、感謝をするといいです。それを言葉にして伝えましょう。人を肯定するという気持ちはそのまま自己肯定感に繋がります。(麻奈美)

Q-手話を使って分かる環境がほしかったという話でしたが、幼稚部や幼稚園の時にもっとこうしてほしかった、今思えばこうしてほしかったということは他にもありますか。

手話の否定をしないこと。手話の選択肢をつねに掲示すること。(陽道)

Q 地域の聞こえる親との交流はありますか?また町内会の行事などに参加される時もコミュニケーションは簡単ではないと思いますが、いかがでしょうか?

筆談です。町内会の行事はコロナでなしです。(陽道)

これまで住んだところには、積極的な町内会がなかったので参加経験がありません。今住んでいるところの隣人や大家さんとは筆談、スマホアプリとかでコミュニケーションできています。(麻奈美)

Q 手話を学ぶ上でのポイント、良いコミュニケーションをするための手話を教えていただけますか。よろしく願いいたします。

正解のあるコミュニケーションなんてものはないですね。常識的なコミュニケーション、はあるかもしれませんが。その場合、手話も日本語も関係ないです。

手話を学ぶにあたってのポイントは、目の前にいる相手を、自分が手話を学ぶための道具にしないことです。手話よりも相手に興味をもてば、おしゃべりがはずんで自然と手話が身につくでしょう。(陽道)

話してみたい!話を聞いてみたい!というようなひとを見つけてください。きっかけはなんでもいいんです。共通の趣味やテーマがあればすてきですね。そして相手を否定しないこと。合わないなどおもったら静かに距離を取ればいい。無理はしないこと。何よりも一番大切なのは、わかったふりをしないこと。(麻奈美)

Q 子育ての中に苦労したことは、ありますか?(夜泣き、両親の視野外で子供の泣き声など) -これからの子育てやご自身の目標や決め事があれば、教えてください。

あるけどわすれました。これからの目標は、こどもとぼんやりしながら、どこかにいって、おしゃべりする時間を、たっぷり、たっぷりもつことです。(陽道)

苦労したこと…あつたはずなんです、ポーンと忘れてしまっています。一晩で大きなおねしょを2回もされて後始末でてんやわんや、ぐらいいかな。子供の泣き声などの音関係で困ったことはありません。わたしが聞こえないということは生まれつきのことで、これまで音に頼ろうとしたことはなく、視るということと、身体に響いてくる振動で生きてきたからです。これからはいろんなところへ一緒に行き、会い、いろんな世界を体験していきたいです。(麻奈美)

Q 今生活されていて、聞こえないことで困られていることや、ほしいサポートがありますか。

うーん、いま、思いつかないな、、、ああ、手話通訳を仕事としている方々への給料をもっとあげてほしいですね。そうすることで、ろう通訳の方とか、若い世代の手話通訳者、男性の手話通訳者が増えていったりすることが、それがめぐりめぐって、ろう者のこれまで以上の活躍につながるはずだからです。(陽道)

手話通訳者、手話通訳士の待遇、報酬、制度をもっと良くしてほしい。(麻奈美)

Q 人工内耳の装用についてはどんなお考えを持っているのか、しりたいです。

補聴器と同じような認識です。肯定も否定もありませんが、人工内耳を受けさせるべく、手話を否定して、聴覚活用することで聴者のように話せるということばかりを訴えることだけは絶対にやめてほしいです。(陽道)

陽道さんの考えと同じです。(麻奈美)

Q 聾学校から地域の学校への就学を希望する児童生徒が多いです。難聴学級で学ばれていたと いうことですが、今振り返って、聾児、難聴児の児童、生徒に就学を勧めるならどっちがいいと思 われますか？

生徒の自我によります。「生徒」とひとくくりにすることをぼくは好みません。(陽道)

選択肢はいくつあってもいいと思います。ただ、偏りのない情報を提供し、見学し、体験させてから生徒本人に決めさせてほしいです。「やっぱりろう学校がいい」という本人の気持ちも掬える環境づくりも必要です。本人以外の者のエゴにならないように。

ろう学校が遠くて通学困難なひともいますし、家庭の事情でろう学校へ通えない場合もありますね。その場合は地域の学校、家庭以外の居場所を作ってあげて下さい。フリースクールや習い事とか。そこに手話もあれば最高なんですけど…。(麻奈美)

Q ろう学校幼稚部の教員に期待することがありましたら教えてください。

手話という選択肢を、子どもと親に、常に掲示しつづけてほしいです。そして、手話を言語としながらも働くことができる先輩のろう者のモデルを常にリサーチしてほしいです。(陽道)

ロールモデルとなるろう者をどんどんゲストに呼んで交流会を開いてほしいです。オンラインでも。直接招待が難しいのであればロールモデルに関わる動画、ニュース、情報を常に集めて情報共有して行ってほしいです。保護者達にも、情報収集の協力を順番にお願いしてみるというのもいいかもしれません。(麻奈美)

Q 聴覚障がい児にとっては、手話と共に日本語の獲得も大切です。著書の中で、子どものころ親との会話はキュードを使っていたと書かれていたように思います。読書によって豊かな日本語を獲得したと言われる聴覚障がい者はおられるのですが、齋藤さんが日本語を獲得する上で、キュードスピーチはどんな役割を果たしたのでしょうか?良ければキュードスピーチのメリットとデメリットを教えてください。また、高度~重度の聴覚障がい児に日本語を獲得するための方法についてアドバイスがあれば、教えてください。

ぼくはキュードは学んでいません。その本は別の方が書かれたものだと思います。

高度・重度ということだと、ぼく自身の経験から、たとえ文章力がそれなりにあるように見えても、もしかしたら意味と意志がしっかりと深いところまでつながったコミュニケーションの経験が非常に乏しく、やりとりすることの心地よさをもしかしたら知らないかもしれません。

それぞれの子のこばにあわせて、コミュニケーションの感動をまず知ってもらうことから始めなければならぬと思います。

とにかくも聴者の大人が、ろう者の子どもがやりとりする際において、「きっとやりとりできているだろう」と少しでも思うことは悪手のように思います。「伝わっていないだろう。それでもどうやったらより伝えられるか」というスタンスに立って、子どもを見つめる必要があると思います。(陽道)